

横穴式石室古墳における複室構造の形成

小田, 富士雄

<https://doi.org/10.15017/2244126>

出版情報 : 史淵. 100, pp.281-297, 1968-03-01. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



横穴式石室古墳における複室構造の形成

小 田 富 士 雄

一、問題の所在

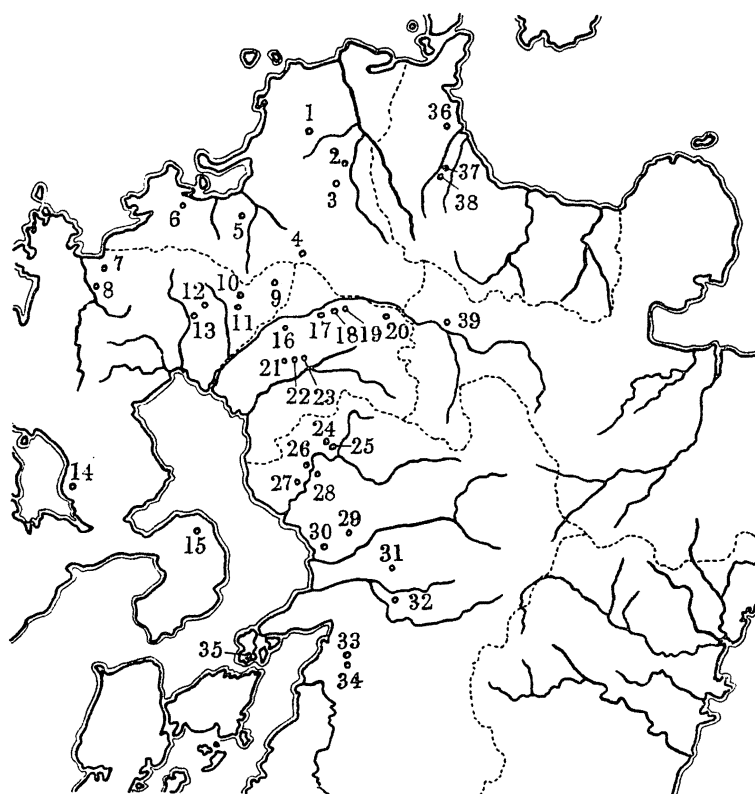
五世紀前半代に導入された横穴式石室は、わが国の古墳時代文化を前後二期に大別する重要な意義をもつていた。わが国で横穴式石室が最初に登場した地域は北九州の玄海灘に面した筑肥沿岸地域であつた。福岡県・丸隈山、佐賀県・横田下の両古墳はその初期に位置づけられる著名な例である。その後、五世紀後半代になると北九州各地に横穴式石室が採用されるようになった。これらの古式横穴式石室はすべて単室であつて、入口の両側に短い石積み¹の壁を築いて、一種の前庭の如きものをつくる場合が多い。しかし、六世紀後半代になると北九州各地に普及した横穴式石室古墳には前後二室を設け、羨道と称される通路を附設するタイプのものがみられる。横穴式石室古墳におけるこのような複室構成はいつ頃からどのようにして形成されてきたものであろうか。現存する後期古墳は古く盗掘されて開口したものが多く、従つて古墳の年代を正確に位置づける基準となる副葬遺物は不明の場合が多いのである。そこで筆者は上述のような問題を究明するために、比較研究できる遺物をもつた北九州地域の古墳をえらんで数年来調査を行つてきた。本稿はこの問題について現在までに到達した成果と、古墳文化期にしめる意義について考察を加えてみようと思う。

二、調査の実例

(1) 福岡県・王塚古墳（嘉穂郡桂川町寿命）（第4図）

国鉄筑豊線桂川駅の北方、金比羅山塊の麓に発達した洪積台地上にある前方後円墳である。昭和九年この土砂を採掘

横穴式石室古墳における複室構造の形成（小田）



第1図 5世紀中葉～6世紀後半主要古墳分布図

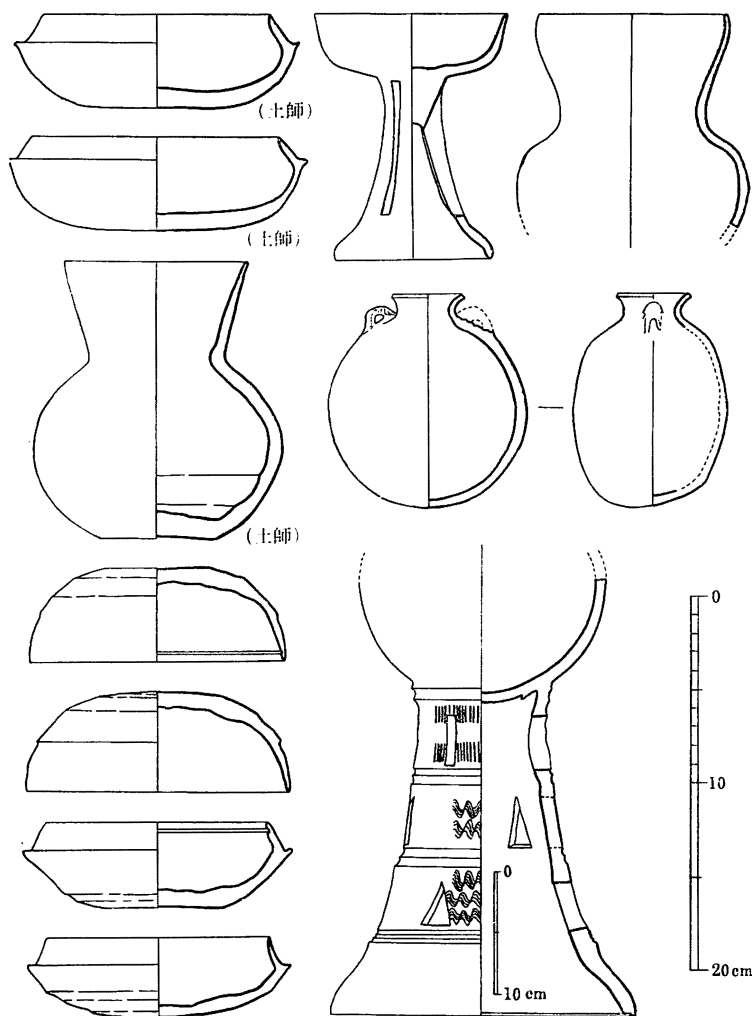
- 筑前 1. 竹原 2. 川島神社裏 3. 王塚 4. 五郎山 5. 日拝塚 6. 丸隈山
 肥前 7. 横田下 8. 島田塚 9. 太田 10. 東尾大塚 11. 目達原古墳群 12. 関行丸
 筑後 13. 西隈 14. 黄金山 15. 高下
 肥後 16. 浦山 17. 下馬場 18. 寺徳 19. 珍敷塚 20. 塚花塚 21. 石人山 22. 岩
 戸山 23. 乗場
 肥後 24. チブサン 25. 臼塚 26. 永安寺東 27. 大坊 28. 江田船山 29. 釜尾
 30. 千金甲一号 31. 井寺 32. 小坂大塚 33. 姫ノ城 34. 大野窟 35. 長砂連
 豊前 36. 番塚 37. 庄屋塚 38. 箕田丸山
 豊後 39. 法恩寺古墳群

指定史蹟として保存されている。発見当時福岡県から報告書が刊行され、つづいてその重要性から京都大学考古学教室の調査が行われて詳細な研究報告書が発表されて、今日では学界著名の古墳となり見学者が跡をたたない盛況である。³⁾

石室は南西―北東の主軸方位をとる後円部中央にあつて北西くびれ部に開口する横穴式石室である。発見当時、前室側壁上方を掘開したので、今日に至るまで入口は積石で閉塞されたままの状態が保たれていて外部の構造は未調査である。石室内の構造、装飾、遺物については報告書にくわしいので概要を述べるにとどめる。石室は二室から構成され、主室は前後四・二米、左右幅三米の長方形プランをなす。三面を構成する壁面は各一枚の花崗岩巨石を立て、その上に横長い割石を迫持式に小口積みに構築し、床面から三・六米で一枚石の天井に達する。奥壁の中途では床面から二米余のところで左右に梁状にかけ渡した石棚が設けられている。前室との間には花崗岩の袖石を左右に各一枚立て、上に方柱状の楣石を渡して、その上に小窓を設けたのちに天井を受ける特異な構造を示している。前室は幅は主室と大差ないが、天井までの高さは主室の約半分、長さは二米で前方が積石の閉塞壁となる。左右壁は主室のような立石（腰石）がなく、床面から天井まで割石小口積みである。両室を通じて壁石の空隙は粘土で充填されているが、主室の方が前室より入念である。閉塞壁は下半部では粘土の充填がみられ壁面も小口面の出入をそろえたような配慮がみられるが、天井附近ではやや雑で内部仕上げの後、最後にここから外部に出てふさいだものであろう。

主室では奥壁沿いに石屋形を設け、一体合葬の棺床が据えてある。その前面左右には各一個の燈明石が添えられている。彩色の装飾は主室に施され、三壁面を構成する腰石、石屋形には三角形を碁盤目風に配し、その上、左右両壁と前壁には劔、大刀、楯が二―三段に並列して描かれている。燈明石、前室正面には劔、双脚輪狀文、蕨手文、騎馬人物などが描かれる。小口積みした割石の壁面には星文をあらわすとみられる珠文が配されている。これらの彩色には赤、緑、黒、黄の四色が巧みに配合されていて石室内を荘厳にする効果をあげている。

副葬品には主室から装身具（金・銀・銀鈴・管玉・丸玉・小玉・切子玉・寶玉）、鏡（変形半円方形帯神獸鏡一）、武器（直刀・刀子・鉾・鏃・掛甲）、馬具（鞍金具・鐙・轡・杏葉・辻金物・鈿具など）、前室から土器（土師器埴一・



第2図 王塚古墳発見土器実測図

同蓋坏四・須恵器蓋坏一・同坏三）、封土中から須恵器（台付壺二・高坏一・提瓶一・埴一）、埴輪（円筒埴輪のほか最きわ近蓋頭部が発見された）が発見された。この古墳の年代を知る最もよい手がかりは前室及び封土中より発見された須恵器、土師器の類で、近年急激に進展した土器研究の成果に照して須恵器編年の第

Ⅲ期に比定される。⁽⁵⁾ 土師器もまた鬼高期とされる特徴をよく示しており、その前半代と思われる。従つて両者の組合せから六世紀代中葉頃にこの古墳を位置づけるのが妥当であり、このことは他の副葬品と合せても無理ないところである。

一九六五年二月、王塚古墳保存施設の改修に際して桂川町教委の依頼をうけ、従来不明の羨道部を調査する機会に恵まれた。諸種の事情から三日間で前室右壁側の延長を調べるにとどまつたが、これによつて王塚古墳石室構造の全貌をほぼうかがうに足る資料とすることができであろう。乃ち、左壁は閉塞積石面から一・五米まで延長されるが、左壁の石積みは次第に通減される。従つてプランにおいて前室と羨道の区別は袖石を立てるなどのような特別な施設はなく、立面において前室天井石のはずれに閉塞積石を積みあげて区別したにすぎない。しかも閉塞積石は外側に控え積みの如き構造もなく、積み石間に粘土をつめて固着をはかり、外側を土砂で埋めたものであつた。

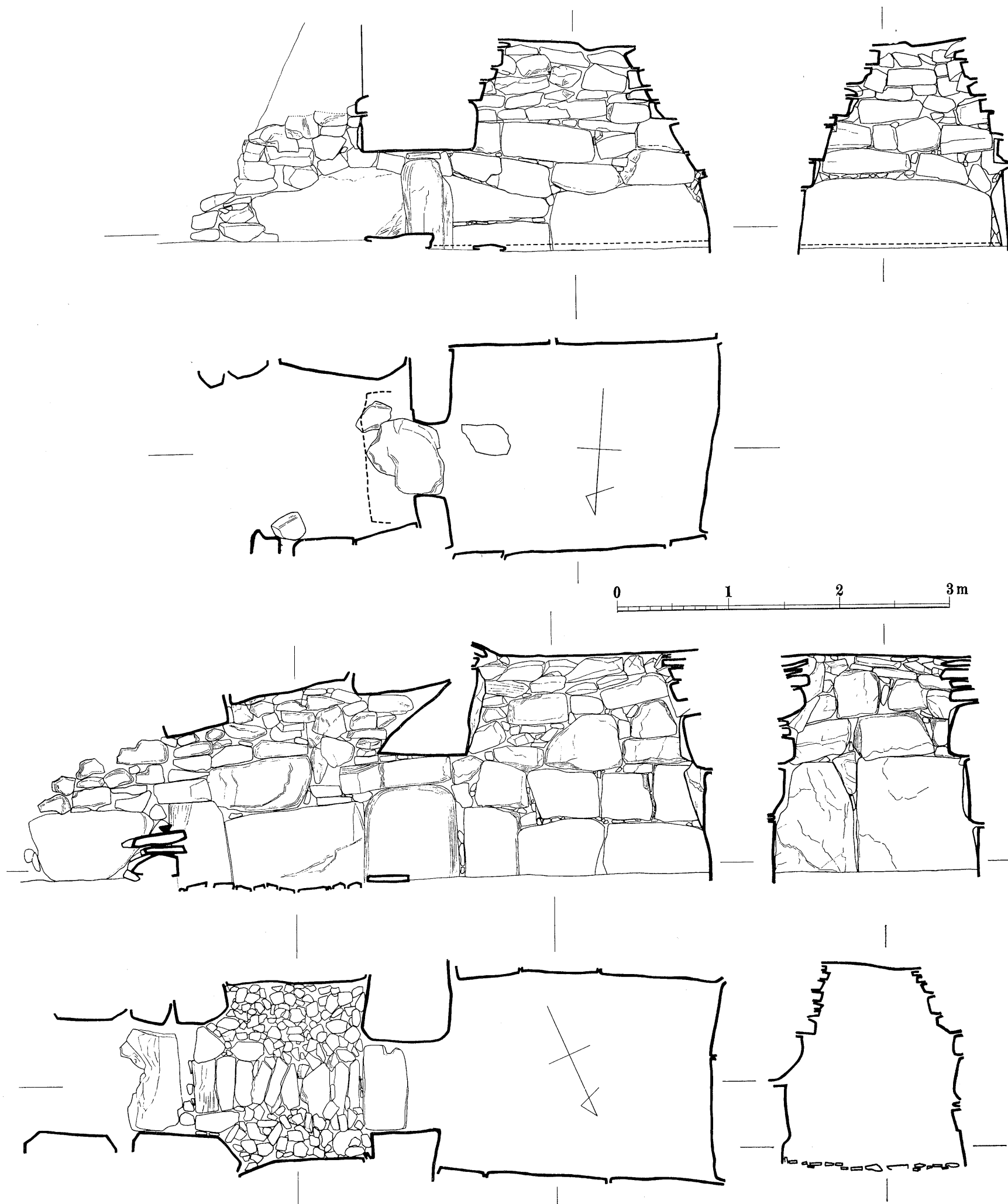
(2) 福岡県・箕田丸山古墳（京都郡勝山町箕田）（第3図上）

豊前京都平野の西南奥つきの箕田部落内に丸山古墳と称される前方後円墳がある。ほぼ南北方向をとるこの古墳は、以前から後円部に西に開口する単室横穴式石室が知られていたが、偶々一九五一年八月末に地主の故丸山仙之助氏が東側の前方部側面を採土中石室に掘りあて、入口の閉塞積石を除いて変形五獣鏡一面をはじめ刀剣、槍、鏃、馬具、玉類、須恵器、砥石などを発見した。なかに金銅製透彫鞍金具や金銅製単竜環頭太刀などを含む注意すべき副葬品があつた。ところが筆者らが調査に赴いた折に、丸山氏宅納屋に格納中、一夜盗難にあつて鏡、馬具の一部、須恵器が持ち去られ、現在残りは九州大学考古学陳列室に譲与されている。石室については一九六五年、九州大学を中心とする石人石馬の総合研究の一環として実測図を作成する機会に恵まれ、長年の宿題を果すことができた。⁽⁶⁾ 副葬の須恵器はこの地域における第Ⅲ期の基準資料として注目された。⁽³⁾ 石室は横穴式単室で、奥行二・三米、左右一・八米の長方形プランをなす。やや大きな花崗岩を立てて腰石とし、その上に同じ割石を迫持式に小口積みして天井を一枚の大石でおさえ、高さ一・八米に達する。入

口の左右には袖石を立て、羨道がほぼ同幅で一・八米ばかりつづいている。羨道も腰石を使用し、割石積みとなるが、石室内にくらべてやや粗雑である。副葬品からこの石室の年代は六世紀中葉前後に比定できよう。

(3) 福岡県・庄屋塚古墳（京都郡勝山町下黒田）（第3図下）「折込」

豊前京都平野のほぼ中央にある前方後円墳で、近くには巨石墳で著名な綾塚、橘塚がある。北東―南西の方位をとり全長七五米に及ぶ。前方部に東側に開口する複室の横穴式室があり、早く盗掘されてしまったが、後円部石室は未掘である。この古墳も前述の箕田丸山古墳と合せて一九六五年度に測量調査を行ったが、その際、土砂流入のはげしい前室を清掃したところが、床面の敷石がよくのこり須恵器坏及び蓋計一四個が発見されて、箕田丸山古墳とほぼ同年代に位置づけられることが確かめられた。石室は全長六・二米。後室は奥行二・四米、左右幅一・八米。前室は奥行一・二米、左右幅一・六米。両室の境には左右両側に袖石を立て、羨道は袖石の幅一米に合せて延長される。構築に使用された花崗岩石材はさほど大きくはなく、後室でも奥壁二枚、左右壁各三枚の石を立てて腰石とし、その上に積み重ねられた壁石も次第に大きさが遞減されるようなものを選んで立てて重ねられ、天井近くで水成岩の割石を小口積みにする。壁面の泊持は箕田丸山例の如く急ではない。従つて天井の面積はかなり大きい、これを一枚の巨石でふさぎ、床面からの高さ二米に達する。前室の構造も後室と大差なく、天井がやや低いくらいである。むしろ床面敷石の配置に中央部後室に向う通路の部分だけにやや大きな平石を並べて通路としての意味を明確にしたところが注意される。前室入口まで天井石が構築され、その下に割石を平積みして閉塞した状態が確かめられた。この古墳では、遺物の上で箕田丸山古墳と大差ない年代を示しながら、複室構成をとり、石室の構築法に著しい差違のある点が両古墳同一地域に所在することと共に注目されるのである。



第3図 福岡県（豊前）箕田丸山古墳（上）と同・庄屋塚古墳（下）の前方部石室実測図（石人石馬研究会提供）

(4) 熊本県・大坊古墳(玉名市玉名・大坊) (第4図)

玉名市高瀬の北方にあたり、菊池川と錦川の間にある丘陵の南端、玉名平野を望むところにある。石室は古くから天井近くが開口してそこから出入していたので土砂が石室下半部に流入していた。その現状については一九一六―一七年に浜田耕作、梅原末治両氏の調査があつて学界に報告されたが、石室の全貌、遺物からする正確なる年代観を欠いていた。一九六三年に田辺哲夫、田添夏喜氏等によつて本格的な調査が行われ複室構造であることが明らかにされた。石室は安山岩割石を小口積みしたもので、複室と羨道から成る。後室は隅丸正方形に近いプランで奥行三・四米、左右幅二・七米、高さ二・八米に達する。奥壁に沿つて石屋形があり、その奥壁には赤、青二色を使つて三角形連続文が五段に配されるが、その二段目と四段目には三角形の中を円形に塗りのこした地肌のままの円文各三個がある。石屋形の側面、正面袖石の部分にも三角文が消えのこつている。各室の境には袖石を立て、扉石でふさいであつたが、後室正面の扉石にも三角文彩色がみられた。後室は迫持式の壁構築を示し、左右にかけわたした天井石は三枚である。前室は前開きで奥行一米、左右幅一・四―一・六米、高さ一・四米である。羨道は長さ一・四米でやや東にねじれている。壁石は次第に通減される積み方がとられ天井はない。副葬品は後室から刀、鉾、鏃、金環、管玉、切子玉、ガラス玉、金製及び銀製垂飾付耳飾、真珠が、前室から馬具(杏葉、鐙)、刀子、須恵器(高坏二、一、提瓶二)、土師器(高坏一)が発見された。須恵器の示す特徴は第Ⅱ様式から第Ⅲ様式の間におかれ、王塚期よりもやや古い文化様相をもつていたので六世紀前半代に比定できるであらう。さらに伴出の杏葉が福岡県・岩戸山古墳の石馬に着装された状態を彫刻している杏葉と同類であることもこの推察年代観を裏付けるであらう。

三、複室構造の形成と地域性

前項で複室形成について重要な例とみられる四つの古墳調査の概要を紹介した。これらの実例から北九州にあつては六横穴式石室古墳における複室構造の形成(小田)

世紀の前半から中葉にかけての時期―須恵器編年の第Ⅰ期から第Ⅲ期の時期に複室構造が形成されるであろうという見通しがえられることになった。そこでこの複室形成期の北九州各地における古墳の実態を福岡県（筑前、筑後、豊前）、佐賀県（肥前）、熊本県（肥後）、大分県（豊後）の六地域について概観し、その傾向を摘出してみよう。

筑前では第Ⅰ様式の須恵器を副葬して王塚より一時期さかのぼる日拝塚（筑紫郡春日町）は長方形プラン単室で、三方に腰石を立ててその上に小口積みした構造である。羨道部がやや長くなり天井石を架す傾向がみられる。次に王塚期では前項でも述べたように前室があらわれるが羨道との構造上の区別は明瞭でない。王塚とほぼ同期或はこれにつづくとみられる須恵器を出土した五郎山古墳¹⁰（筑紫郡筑紫野町原田）では複室と羨道を完備した姿がみられ、石室構築法としては前項で述べた庄屋塚に近い。

豊前では前項に述べた箕田丸山古墳と庄屋塚古墳がいずれも第Ⅲ様式に比定される須恵器を出土しながら、前者は単室であり、後者は複室であるところに単室から複室への接点をとらえることができる。以下。

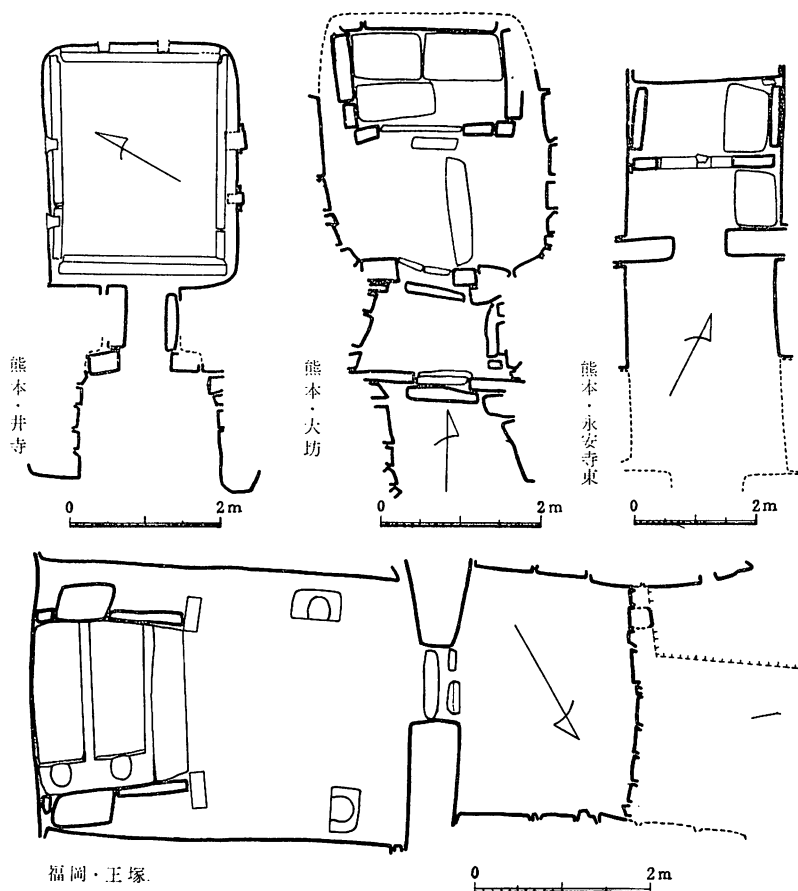
筑後では「日本書紀」や「筑後風土記」の逸文に照して六世紀前半代に比定しうる岩戸山古墳¹¹（八女市吉田）は、学界にも著名な筑紫国造磐井の墳墓として編年上最も重要な位置を占めるものであるが、石室は未掘である。しかし封土より発見された須恵器は第Ⅱ様式に属するものである。そのすぐ東隣にある乗場古墳は第Ⅲ様式の須恵器を出土して王塚期にほぼ近いが、複室と羨道を完備して各々の境には袖石を立て、複室の壁は巨石を立て腰石とし、その上に長方形割石を小口積みしている。羨道は腰石なく、小口積みである。このような構築法はまた王塚のそれに近い。

肥前では東尾大塚¹²（三養基郡北茂安村）の羨門外部に第Ⅰ様式の須恵器葺坏、壺を並べて副葬した状態が報告されている。五、六世紀の交点あたりに位置づけられるが、単室で簡単な外開きの広い羨道がついたもので、むしろ前庭というにふさわしい。この形式の石室は六世紀前半頃まで北九州各地にみられるもので、故松尾禎作氏が「只」字形プランの石室

と称していたものである。ついで第Ⅱ様式の須恵器坏を出土した島田塚⁽¹³⁾(唐津市鏡・今屋敷)は金銅冠、銅鏡、甲冑などを出土し船形石棺を安置した注目すべき前方後円墳であるが、プランは長方形石室に長い羨道が附加されたようにみえるけれども、立面形は石室に入る手前の天井をやや高くして、腰石を使用しない構築法をとつて、原初的な複室構成の姿とみることができる。しかしこの時期には日達原古墳群⁽¹⁴⁾(三養基郡上峯村・神崎郡三田川村)の稲荷塚後円部石室や塚山古墳⁽¹⁰⁾のようにまだ単室古塚の構築が大勢であつた。次の時期乃ち福岡県の王塚や五郎山古墳の時期に近いと思われる太田古墳⁽¹⁰⁾(鳥栖市田代本町太田)では完成した複室構造をとり、構築法も五郎山古墳に近似し、壁画に連続三角文を主体とする点では王塚に接近している。

肥後では第Ⅱ様式の須恵器を出土した大坊古墳が現在のところ副室構造の初見であるが、これはこの地方で先行する井寺や千金甲一号⁽¹⁰⁾などの五世紀後半代に比定される石室構造を基本的に継承している。これにつづくとみられる複室構造のものにチブサン⁽¹⁰⁾(山鹿市城・西福寺)、釜尾⁽¹⁰⁾(飽託郡北部村釜尾)、永安寺東⁽¹⁰⁾(玉名市玉名・永安寺)等の古墳があるが、チブサンは構造上大坊古墳に近く、釜尾はプランでは羨道と前室を同幅にして一見区別しにくいが立面形では天井をやや高めている点で佐賀県島田塚に近い。しかも腰石を使用してその上に板状割石を小口積みする点で、また装飾画に連続三角文、同心円、双脚輪状文などを主文とする点で王塚(福岡)に近い年代が考えられるが、これよりやや下るであろう。永安寺東古墳は更にこの後につづく時期であろうが、前室部の入口、羨道が破壊されている。

豊後では筑後川をさかのぼつて筑後方面と文化交流のあつた日用盆地の法恩寺古墳群⁽¹⁵⁾(日田市刃連町法恩寺)に例をとつてみると、その第四号墳では須恵器第Ⅱ様式後半から第Ⅲ様式前半代のものを副葬して六世紀前半代でも中葉に近い位置に比定されるが、単室に外開きの幅広い前庭が附加された構造のもので肥前の「只」字形石室に系譜をたどることができる。ところがこの西隣りにある第三号墳は奥壁以外には立石を使用せずやや大きな割石を小口積みにした完全な複室



第4図 肥後及び筑前の複室形成期石室平面図四例

構造のもので、赤色の同心円文、動物の彩画がある。さらに石室プランには胴張りをつくった点でも明らかに筑後型の横穴式石室をうけついでものであることが指摘できる。この古墳では第Ⅳ・Ⅴ期の須恵器を多数出土して六世紀後半に築造されたことが知られた。

× × ×

以上北九州六地域について概観したところから、肥前、肥後では六世紀前半代に比定される須恵器第Ⅱ様式の段階に複室の形成が現れ、筑前、筑後地域では第Ⅱ様式期の基準となる好例に恵まれない現状であるが、日拝塚における腰石の使用や羨道の完成というところからみて第

Ⅱ様式或はおそくとも第Ⅲ様式の出現までには形成されはじめたと考えられる。その際、肥前、筑前、筑後、肥後の環有明海文化圏ともいふべき容易に文化交流が行われうる環境が注意されるであろう。しかし、筑前でも以上の地域とは地形的にも流通しにくい性質をもつ筑豊地域では王塚古墳にみる如く、第Ⅲ様式の段階で複室が形成されはじめ、遠賀川を交流のルートとして広がり、豊前地域では「只」字形石室の系統をうけたとみられる単室の箕田丸山と複室の庄屋家が共に第Ⅲ様式の時期に比定されるということは、この地域でも六世紀中葉頃に複室形成への転換があつたことを示唆してくれるであろう。同じような現象は筑後川のルートで流入したとみられる豊後日田盆地にも指摘できる。従つて、筑豊、豊前、豊後の地域にはややおくれて六世紀中葉頃に複室の形成がみられるようになったということになる。勿論、複室が形成され、定型化しても単室墳の系統は併行して行われていたことは否定できない。畿内における後期古墳の大勢は単室墳である。広く東亜における複室墳分布の観点からすれば、高句麗の範図であつた通溝から北鮮、日本の北九州、近畿の一部が顕著なものであることはすでに指摘されているとおりである。⁽¹⁶⁾従つて、北九州における複室形成の過程が横穴式石室の導入期より一世紀以上もおくれてみられることからすれば、導入期の横穴式石室が大陸の影響によつて複室の形式から単化された形式として輸入されたという考え方には⁽¹⁶⁾ただちに賛意を表しがたい。そこにはまた別の構築原理があつたことも否定できないであろう。その意味からも複室の形成が後期古墳文化の展開の中でどのような外的誘因を考えられるかという観点から検討すべき立場が生じてくるのである。

四、古墳文化期における複室形成の意義

五世紀代に朝鮮半島から導入せられた北九州の横穴式石室には二つの型があつた。一つは方形プランであり、もう一つは長方形プランである。これが六世紀代になると、前者は肥後地方に、後者は筑前、筑後、肥前、豊前、豊後地方に流行する傾向がみられる。⁽¹⁷⁾特に複室を構成するものは後者と結びついて六世紀後半以降に流行している。また両者を使用石材

の面からみれば、前者が板状割石や阿蘇系凝灰岩をもつて構築するのに對して後者は初期には板状割石を用いているが次第に花崗岩の大石を使用するようになる。このような用材の相違は両者の地域で各々産出される手近かな材料を使用したにはかならない。

ところで後に複室形成と密接な関係をもつたのは長方形プランの石室であるが、このタイプの石室としては現在のところ北九州で初期の横穴式石室としてあげられる福岡県丸隈山古墳、佐賀県横田下古墳が知られており、この系統としては半島百済の第一期漢城時代（西暦三五〇頃―四七四年）に比定される京畿道広州附近の可樂里、中谷里、梅竜里などの古墳にたどることができる。これらの百済初期の横穴式石室が高句麗の平壤遷都（西暦四二七年）以後にその影響をうけたものとみるか、¹⁹或はそれ以前から百済に伝播したとみるかはにわかには決し難いが、いずれにしても楽浪郡に移植された中国墓制をとりいれた高句麗の古墳に発したとみる点では異論ない。

このように高句麗或は百済にその系統を求めうる北九州の初期横穴式石室は丸隈山（福岡）―横田下（佐賀）―関行丸（佐賀）という変遷をたどるなかで、石室内では箱式棺から障壁へと変化して六世紀代をむかえるのであるが、¹⁷いずれも単室構造である。またその後につづく王塚（福岡）、乗場（福岡）、箕田丸山（福岡）、庄屋塚（福岡）などの前方後円墳と横穴式石室の在り方をみると、初期の丸隈山例の如く石室の位置が後円部の墳頂近くにあつて前方部にむかつて開口するという古墳主軸上にあるものから、関行丸や王塚例の如く石室の位置がやや深くなつて後円部の中心から前方部のくびれ部にむけて開口するという主軸に対して斜交するものへと移り、更に乗場、箕田丸山、庄屋塚例の如く石室の位置が低くなつて後円部或は前方部の横に開口するもの―主軸に対して直交する配置をとる形態へと定着してゆく。この大別して三期に分けられる石室配置の変遷を年代で区切るならば、五世紀前半から中葉まで（Ⅰ期）、五世紀後半から六世紀中葉まで（Ⅱ期）、六世紀中葉以降（Ⅲ期）とすることができる。そうしてこの第Ⅱ期に複室が形成されはじめ、Ⅲ期以降

に定型化し流行していることが指摘できるのである。従つてこの第Ⅱ期は単室から複室への転換期として把握することができる。

複室形成期の過程の中で、これと対応して考えられるものに古墳装飾の問題がある。九州における装飾古墳の出現は、五世紀中葉に比定される筑後・石人山古墳（八女郡広川町一条）の横口式家形石棺の棺蓋に浮彫りされた直弧文、円文をその初見とすることには異論ない。⁽⁹⁾ この幾何学的図形からなる彫刻文様を主体とする初期の装飾は、やがて構造上からみると石棺から石障へと拡大されて五世紀後半には浦山（福岡）、長砂連、井寺、千金甲（以上熊本）などの石棺系、石障系古墳を筑後、肥後地方に流行せしめた（第Ⅰ期）。ついで六世紀前半から中葉にかけて大坊、白塚、永安寺、釜尾（熊本）王塚（福岡）、太田（佐賀）などにみるように石屋形や障壁、或は壁石に赤、青、黄、白、緑、黒などの彩色をもつて三角形文、同心円文、双脚輪状文などの幾何学的図形を主としながら、鞆、楯、太刀、騎馬人物などを描いた壁画系古墳があらわれてくる。鞆のような器材図はすでに千金甲一号墳の障壁に彫刻されていたが、この時期では王塚に典型的に示されるように、壁面に鞆、楯、太刀を幾段かに並列させ、騎馬人物を配していてその配置からは被葬者を守衛し、その葬儀を莊厳化するための意図が感得される（第Ⅱ期）。さらに六世紀後半になると同心円文、三角形文、鞆、楯などの図形は依然としてひきつがれているが、五郎山、竹原、珍敷塚（福岡）などにみる如く、人物の諸種の姿態や狩猟の状況をあらわす生活壁画や、中国系の思想にヒントをえたと思われるヒキガエル（月の象徴）、星辰、冥界に送る天の鳥船、四神（青竜・白虎・朱雀・玄武）などの絵画がみられるようになる（第Ⅲ期）。このような装飾古墳の画題にみられる三つの段階は、横穴式単室の定型化する段階から複室構造形成過程の段階をへて複室構造の定型化の段階に移行した後期古墳文化の各段階に照合することができよう。更に観点をかえてこの三段階を後期古墳の編年に最も有力な手がかりを与えてくれる須恵器の変遷に照応してみると、第Ⅰ期の少くとも後半には第Ⅰ様式があらわれ、第Ⅱ期には第Ⅱ・Ⅲ様式、第Ⅲ期には

第Ⅳ・Ⅴ様式が行われた時代であつたということになる。

以上のように考えてここに至れば、複室構造の形成と装飾古墳の画題にみる生活図や中国系画題の出現という両者の転換期の間に何らかの有機的連関があるのではないかという指摘は容易に生じうるであらう。横穴式石室の出現そのものが朝鮮半島から導入されたことには異論ないところであれば、複室の形成にも外部からの導入が考えられる余地はある。従つて当時の大墳の墓制、さらには伝播しうる楔機の有無について検討すべき段階に達した。

わが国の古墳時代を通じて大陸系の文化は半島を経由して伝来した。その伝達の役割を果したのは「日本書紀」に伝える帰化人の渡来である。応神天皇の世に來朝したという阿知使主や弓月君は漢氏や秦氏の祖といわれ、四・五世紀の頃に半島における漢の植民地であつた楽浪・帶方の遺民が渡来した第一の大きな波であつた。従つて彼等漢・韓人の伝えた文化や技術の源流は漢・魏系統のものであつたといわれている。楽浪郡が高句麗に亡ぼされたのは西紀三二三年であるが、この地域では中国系の埴室古墳が営まれつづけ、その下限は平壤駅構内の永和九年（三五三）銘埴墓までたどられている。⁽²²⁾この墳墓では埴積と割石平積が併用されていて、北九州に出現した初期の横穴式石室が割石平積であるのは楽浪の埴室墳の形成をうつしたものであると考える上に有力な資料とされる。一方、永和九年墓が半島における高句麗・百済らの横穴式石室の上限を示すものであるとするならば、⁽²³⁾楽浪郡の滅亡にはじまつて四世紀後半から五世紀に及ぶ高句麗・百済の抗争、さらには倭の介入、西紀四二七年の高句麗平壤遷都というひきつづいての動乱と高句麗の南下によつて、難をのがれてわが国に渡来したのがこの第一の帰化人の波であつたといえよう。⁽²⁴⁾横穴式石室の出現という現象はこの動向の中に伝播した文化であつたと解釈されるのである。

帰化人渡来の第二の波は「雄略紀」七年のところに伝える陶部・鞍部・画部・錦部・詛語などの渡来である。これをそのまま事実とみるかどうかはともかくとして、このような帰化人の波が五世紀後半頃にあつたということは考えられると

されている⁽²⁵⁾ 彼等は「新^{いま}（今来）」の帰化人としてすでに古く渡来して重任されていた漢・秦氏等の支配下におかれて部民としての身分を与えられた。これはこの頃から朝廷で彼等の新技術を統制下におさめようとしてすすめていた品部設置政策であつた⁽²⁶⁾。このような傾向はわが国の半島における勢力の後退とも密接につながっている。西紀四七五年には高句麗の南下におされて百済がさらに熊津に遷都したことは、これ以後西紀五一四年に百済への四県割譲にはじまつて西紀五六二年に任那が百済と新羅によつて分割されて滅亡するまでのわが国が半島放棄を余儀なくされる歴史をたどる原因となつた⁽²⁷⁾。この時期に渡来した帰化人達は第一次渡来者の漢・秦氏の下部構成員として編成される運命にあつたから、これらの動乱をのがれて渡来した下級技術者或はその技術を習得した我が国の技術者は北九州の有力豪族の下にも保持されえただあろう。ことに強勢を誇つた筑紫国造磐井の如きはひそかに新羅と通じていたと伝えられる如く、朝廷の統制を破る行動をとる者はあつたのである。楽浪・帯方の遺民と称される漢・韓人技術者達は高句麗の裝飾古墳にみるような中国思想を導入した日月星辰、四神図や胡風に換骨脱胎した生活描写を生み出し、複室構造の横穴式石室を築いた⁽²⁸⁾。六世紀前半以降に北九州に複室構造をつくり出し、また裝飾古墳の画題に転換をもたらしした原動力は、これら楽浪・高句麗文化の技術を保持した漢・韓人の百済、任那地方に埋没していた人々が任那の分割・滅亡という過程の中で一衣帯水の北九州地方に析出された結果であつたと考えられる。さらに関連して考えられるのは、以上の六世紀中葉前後に起つた古墳文化の変動の中で、南鮮系の金銀製品（冠帽・垂飾付耳飾・沓・馬具などの）がやはりこの頃から副葬品から姿を消すこと。須恵器生産の上にも南鮮色が消えてゆき、規格化された須恵器の量産と普及という現象がみられることなども任那滅亡ということによつて大陸文化の輸入ルートが断たれたことに起因するであろう。このように横穴式石室における複室形成という現象は六世紀中葉をさかに転換する後期古墳文化の諸方面での変化の一環として理解されるのであり、古墳文化期における最後の大陸文化要素の伝播現象であつたといえるのではなからうか。

論旨多岐にわたり、もつと多くの図、写真を加えて詳説すべき必要を感じるが、すでに与えられた紙数も尽きたので概要を記して後日機あらば補説したい。稿を終るにあたり、大陸の古墳について示数をうけた岡崎敬助教授に感謝申しあげる。(一九六七・九・二九)

註

(1) 初期横穴式石室の年代観については、近年、大阪府・塔塚古墳の調査によつて丸隈山古墳と並んで五世紀中葉に位置づけ、横穴式石室の受容は畿内と北九州で大差ないとの論が行われているが、一昨年から九州大学考古学研究室かつている福岡市老司の前刀後円墳の調査によつて五世紀初頭までさかのぼりうることとなつたので、やはり北九州が畿内に先んじて受容したと考えるものである。

森浩一・田中英夫「大阪府堺市塔塚調査報告―畿内の古式横穴式石室に關連して―」(日本考古学協会第25回總會研究発表要旨) 一九六〇

白石太一郎「日本における横穴式石室の系譜―横穴式石室の受容に關する一考察―」(先史学研究5) 一九六五

(2) 川上市太郎「筑前王塚古墳」(福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第十一輯) 一九三五

(3) 梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚裝飾古墳」(京都帝国大学文学部考古学研究報告第十五冊) 一九四〇

(4) 前掲福岡県及び京都大学の両報告とも土器の実測図を欠いているが、北九州の須恵器編年上からも基準となる重要な位置を占めるものであるから、特に本稿に実測図をかかげた次第である。

(5) 小田富士雄「九州の須恵器序説―編年の方法と実例(豊前の場合)―」(九州考古学二二) 一九六四

(6) 九州大学岡崎敬助教授を代表者とする総合研究「中国・朝鮮・日本における墳墓裝飾の石造遺物の研究」で一九六四―六五両年度実施した。本調査はその第二年度の調査に加えられたもので、石室の測量にあつたのは筆者のほか定村責二、黒野肇、安倍芳一、石松好雄、さらに明治大学大塚初重氏の参加があつた。

(7) 浜田耕作・梅原末治「肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴」(京都帝国大学文科考古学研究報告第一冊) 一九一七

(8) 巨添夏喜「玉名市玉名大坊古墳追加資料」(プリント) 一九六三 小林行雄編「裝飾古墳」七七頁 一九六四

(9) 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎「日拝塚」(福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第五輯) 一九三〇

渡辺正氣「福岡県筑紫郡春日町日拝塚前方後円墳」一九五九

小林行雄編「裝飾古墳」一九六四

(11) 森貞次郎「筑後風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」(考古学雜誌四一卷三三) 一九五五

小田富士雄「九州」(日本の考古学Ⅳ・古墳時代・上) 一九

六六

古賀寿「筑後八女市岩戸山古墳の祭祀用土器」(九州考古学七・八)一九五九

(12) 松尾禎作・七田忠志「北茂安村大塚古墳」(佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第八輯)一九四九

(13) 後藤守一「九州北部に於ける古墳の二三」(考古学雜誌十二卷四号)一九二一

(14) 松尾禎作「目達原古墳群調査報告」(佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第九輯)一九五〇

(15) 賀川光夫・小田富士雄「大分県日田市法恩寺古墳群」一九五九

(16) 末永雅雄「横穴式石室」(東西學術研究所論叢三十三)一九六〇

(17) 小田富士雄「九州」(日本の考古学Ⅳ・古墳時代・上)一九六六

(18) 野守健・神田惣藏「公州宋山里古墳調査報告」朝鮮総督府昭和二年度古蹟調査報告第二冊)一九三五

(19) 樋口隆康「九州古墳墓の性格」(史林三八卷三号)一九五五

(20) 白石太一郎「日本における横穴式石室の系譜」(先史学研究5)一九六五

(21) 原口長之「熊本県山鹿市大字石・白塚古墳調査報告」(プリント)一九五六

(22) 榎本亀次郎・野守健「永和九年銘在銘埴出土古墳調査報告

横穴式石室古墳における複室構造の形成(小田)

告」(昭和七年度古蹟調査報告書第一冊)一九三三

(23) 榎本社人「横穴式石室の年代について―楽浪末期の古墳に關連して―」(古代学研究5号)一九五一

(24) 岡崎敬「安岳第三号墳(冬寿墓)の研究―その壁面と墓誌銘を中心として―」(史淵第九十三輯)一九六四

(25) 関晃「帰化人」一九五六

(26) 今西龍「百濟史研究」一九三四、末松保和「任那興亡史」一九六五

井上秀雄「古朝鮮・辰國・任那・三國」(朝鮮史研究全編「朝鮮史入門」)一九六六

(27) 池内宏・梅原末治「通溝」上・下 一九三八―四〇

梅原末治「朝鮮古代の墓制」一九五七

梅原末治・藤田亮策「朝鮮古文化綜鑑」第二、三卷 一九四八、一九五九